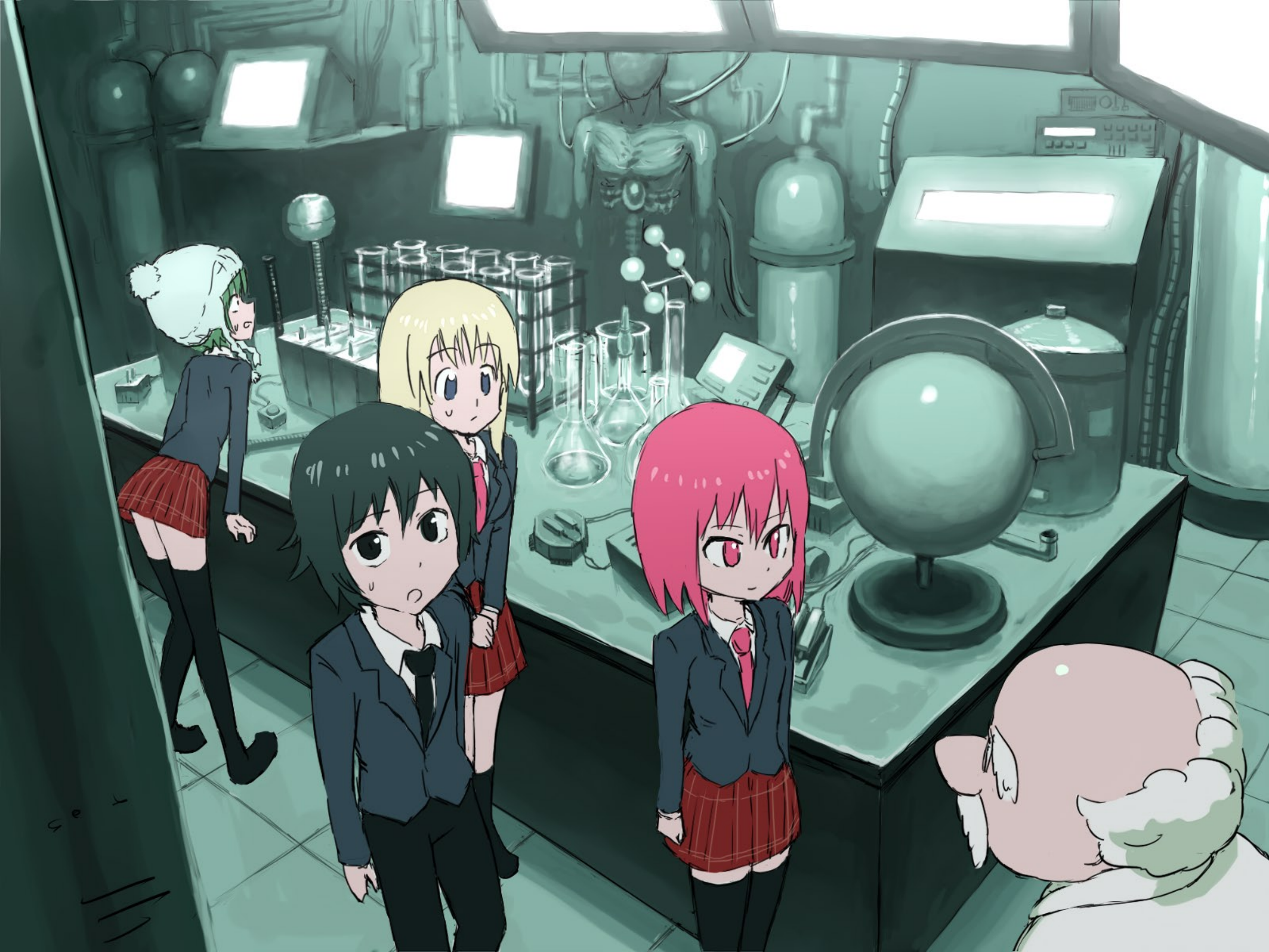
閃光戦士プロミネンス
3

第4話

満員電車、運よく席を確保できた僕たちはすし詰め状態になっていた。
「ご、ごめん夕凪、かかか肩が…」
「べ…別にいいけど…」
「いやぁ、美女二人に挟まれてラッキーだな。星野ぉ～。」
女子二人に挟まれている僕に南が茶々を入れる。何言ってんだよと牽制するが、なぜか海野さんもノリノリで僕をからかってくる。
「あれぇ？照れてるのかな、星野くん？」
彼女に関しては大き目の胸が当たってしまいそうで、別の緊張感があった。
「そ、それにしても、珍しいよな。夕凪から誘ってくるなんてさ。」
「みんなに知ってほしいから…。」
前回の事件から数日。僕たちは夕凪に招待されて、彼女の家まで向かっていた。
彼女は怪人との闘いに巻き込みたくないという理由から、ずっと孤独を選んでいたが、同じクラスである南と海野はあの事件の後も食い下がらず、夕凪との関係を保っていた。僕も危険が伴うとしてもあの電車で知り合った彼女との縁を切りたくないと思っていた。

（夕凪の家か…どんなところなんだろう。）
夕凪は両親がおらず、彼女を引き取った研究者である老人と二人で暮らしているという。彼女の素性は気になっていたが、かなり訳ありのようだし、ヒーローの、それも同年代の女の子の家にお邪魔することになって、僕はかなり緊張していた。
それにしても、南たちは一体どうやって夕凪を説得したんだろうか。
僕と夕凪はあれ以来話せていないし、今こうしているのも彼女たちのおかげだ。僕も来てしまってよかったのだろうか。
「サンキューね、星野。君がいないところなちゃん口説けなかったから。」
「ちょ…！そんなこと…！！」
珍しく夕凪が取り乱して南の口を塞ごうとする。
（何なんだ、この状況は！）
女の子たちにぎゅむぎゅむと挟まれ、僕の気は遠くなっていく。

駅からしばらく歩き、あまり人気のない区画に何の変哲もない一軒家があった。
「お邪魔しま～す…」
中身もきれいに片付いている、ごく普通の家だ。
「わ、わりと、普通の家なんだね。」
南が拍子抜けしたように脱力する。
「こっち。」
夕凪が案内する先には地下に続く階段があった。階段を下りると、さっきまでと同じ空間と思えないようなコンクリ壁が続く。歩き続けると、重々しいサイバーチックな扉につき当たる。夕凪が認証機の前に立つと、扉が機械的な音を立てて開いた。



研究室――そこには雑然とした空間が広がっていた。
「どへぇー…。何この部屋…」
無数に並んだ研究機材、人工筋肉…南ですら唖然としてしまう程の空間だった。
「博士。」
夕凪が声をかけると、部屋の奥から小さな老人が現れる。白衣に伸びきった髭・眉毛。いかにも博士という見た目だ。
「君たちかね、ころなのお友達というのは。話は聞いているよ。」
筧博士は優しげな人物だった。夕凪に何やらスーツの機能についていくつか訪ねている。
「それでどうじゃ、ころな。スーツの調子は」
「はい、順調です。」
夕凪は事務的に答え続けるが、表情は安心と信頼に満ちているようだった。
僕たちは夕凪のことについていろいろ話を聞いた。「閃光戦士プロミネンス」。彼女が活躍しているうちに、ネットやテレビでついた愛称だ。「怪人」「正義の味方」と言われる存在は十年前から現れた。
十年前、宇宙から謎のエネルギーが降り注いだ。隕石、オーロラ、雷…様々な形をとったソレに触れた者は特殊な能力を得る。そしてその力は科学を大きく発展させた。
しかし、その現象以降「怪人」と呼ばれる謎の存在が地球に侵略を始めた。怪人たちは組織を持ち、時には能力を得た者たちも引き込み、人々を襲った。未だ特定できない怪人の拠点は異次元や宇宙にあるのではないかと考えられている。そして怪人を退治する者を人々は「ヒーロー」「正義の味方」などと呼んだ。
十年前、夕凪にもエネルギーが降り注ぎ、超人的な能力を手にした。彼女はショックのせいか、超人になる前の記憶が無いという。
「思い出せるのはがれきの中、座り込んでいたことだけ。あとは女性の形をした発光体が語りかけてきたことを、ぼんやりと覚えている。」
夕凪の周囲は隕石が墜ちてきたように破壊されていたという。周囲は人通りのない山の道路で、幸い被害はなかった。大きなエネルギーを発していた身元不明の彼女を保護したのが筧博士だった。

深刻な出自に僕は言葉を失った。しかし
「もしかして…ころなちゃんって実は宇宙人だったりして」
「こ、こらっ、南」
夕凪は反応に困ったように頬を掻く。
「かもしれんのう。プロミネンスの本来のエネルギーは他の超人を超えていてな。そのまでは制御がきかんのだ。わしら研究者はスーツによってその力をコントロールしようとしているのだよ。」
かもしれんのうって…しかしそんなことがスッと言えてしまう程に夕凪と博士の信頼は確かなんだろう。僕は彼女が自らの秘密や、信頼関係を見せてくれたことに、胸が熱くなった。
「これが私についての情報。私と関わる以上、知っておいてほしかった。」
彼女は僕らの街を守ってくれるヒーローで、少々不器用な同級生だ。どんな存在であろうと、僕たちが彼女を思う気持ちは変わらなかった。

麗らかな休日の午前。季節は少しずつ暖かくなり、街は人々でにぎわう。薄着の女性、はしゃぐ子供たち、平和な一日が始まろうとしていた。しかし、広場の一角に暗雲が差す。

「フハハハ！！この広場は我らが征服したーーーっ！」

広場を三体の怪人が襲撃していた。

「う、うわぁあーーーっ！怪人だーーっ！」

同心円状のマスクに、グレーの全身スーツ。怪人の下級戦闘員「オビット」だ。

普段は強力な怪人の下についているが、今回軽い破壊活動を任された彼らは息を巻いて人々を脅かしていた。人々が霧散し、周辺は混乱状態に陥る。その大きな騒ぎは偶然近くを通りかかったころなの目にも入った。

「あれは…！」

「変身」走りながらそう呟くと、ころなの体は光の粒子に包まれ、スーツ姿へと変わっていく。赤髪の少女は、あっという間に閃光戦士プロミネンスに変身した。

到着したプロミネンスは、怪人の前に立ちはだかる。
「そこまでよ、怪人！」
おおプロミネンス　プロミネンスだ　プロミネンスが来たからには安心だ。市民は歓声に沸く。プロミネンスの姿を見ると先程までの混乱は嘘のように収まり、人々はまるで見物するようにその場にとどまっていた。
「危ないから、下がっていて！」
いつものように避難を優先させるが、プロミネンスの人気や強さへの信頼からか人々はなかなかその場から動かない。それどころか、プロミネンスの勇姿を一目見ようと人が集まってくる。こうなってしまっては人々は聞く耳をもたない。
（しかたがない。早く済ませてしまおう。）
「ククク・・・人気者だなぁプロミネンスよ。みんなの前でヒーローショーとでも洒落込もうかい？」
「けがをしたくなかったら、早く去りなさい。」
「ククク…かっこいいねぇ。だが今日こそ貴様の最後の日だ。我らオビットの積年の恨み、ここで晴らさせてもらうぜ！」
オビットたちは自信満々で宣戦布告するが、毎回プロミネンスにコテンパンにされている。プロミネンスは呆れつつも、これから始まる戦闘に気を引き締めた。
プロミネンスの素早い攻撃がオビットたちを翻弄する。“閃光”のようなその速度は通名となるほどだ。
「くっ…！速い…」
三対一にもかかわらず押しているプロミネンスに、市民から歓声が沸く。
（もう…、見せ物じゃないのに…！）
以前同級生を人質に取られ、失敗したことのあるプロミネンスは市民の存在に気が散る。

「…だがこうすればっ！」
「ぐ…っ！」
その一瞬の隙を突き、背後に静かに迫っていたオビットが羽交い絞めにした。
「こんなことしても、時間稼ぎにしかならない　とか思ってるだろ？だがそれで十分。」
「…！？」
プロミネンスは敵から不穏な空気を感じる。何か策があるようだ。市民は若干どよめいたが、プロミネンスが負けるはずはないと確信していた。
「く・・うっ・・ふっ…！触るな…っ！」
両脚も二人掛かりで拘束する。まだ十分にある体力で振りほどこうとするが、さすがに怪人三体の力は一度に振りほどけない。
「ククク・・イキのいい魚が引っかかった。」
「この程度で勝った気に…！」
「それはどうかな。残念ながら貴様の敗北は、この状態ですでに決定している。」
そういうと、オビットたちはガバッとプロミネンスを開脚させた

「貴様の“弱点”…知っているぞォ…？」
オビットは意味ありげに、うれしさを隠しきれない声で言う。
「っ…！」
「今から貴様の“弱点”を突いて、突いて、突きまくって、骨抜きにしてやる。この体制なら容易いよなぁ？」
――――“弱点”
プロミネンスはドキッとしたが、怪人に弱みを見せるわけにはいかない。
「な…なんのことだ…っ！」
「クク…とぼけちゃって…正義の味方・プロミネンスはとある部分をクスぐられると…」
トントントントンッ。
怪人は腰を振り、自らの股間でプロミネンスの臀部を何度か突き上げた。
「…！」
間違いない。知られている。プロミネンスは“内股”が極端に弱く、敏感だということ。
「ほらほらどーした？表情が曇ったな？」
トントントントン。プロミネンスは性行為を予感させるような挑発に憤る。
「や、やめろ…っ！んっ、そんなとこは、ない・っ！」
「それでは、実際に確かめて見せましょうか。」
プロミネンスはまさかの作戦に戦慄し、振りほどこうとするが、今日に限ってオビットは絶対に放すものかという根性を見せる。
「それでは、くすぐりスタートお。」

「っ…！」
こちょこちょ…怪人の手が、徐々に内腿を登ってくる。
「い～～ち…に～～い…さあ～～ん…」
（～～～～～っっ…！）

さわさわとソフトタッチで何週もくすぐられ、プロミネンスは叫びだしそうになるが、ここは市民の前。そんな姿を見せるわけにはいかない。

「どうしたプロミネンス？みんなの前だからって強がっているんじゃないか～？」

「馬鹿に、する、な…！んん…っ！」

市民の視線は遠目だがしっかりとプロミネンスの姿をとらえている。市民は「なんで反撃しないんだ？」「あいつら、プロミネンスの脚ばっかり狙ってやらしい」などと騒めいている。

（ま、まずい…早く終わらせないと…！）

プロミネンスはもがくが、怪人の拘束は容易に外すことができない。

「うっ…！うぅん…っ！」

「くく、随分色っぽいもがき方だな。」

怪人がまた背後からトントンッと股間を突き上げ、羞恥を煽る。

（バカにして…っ！こんな下品な技に、絶対に屈したくない…！）

プロミネンスは内股が弱点だとばれないよう歯を食いしばるが、くすぐりは続く。

「なっ…！」
「プロミネンス、征服～♪」
プロミネンスはいつもはなんでもない怪人に大切な部分を足蹴にされ、屈辱を感じる。
「こ、この程度で…っ！」
きっと睨み付けるが、怪人はにやけたままだ。
「へへっ、さっきので足腰イっちゃってるクセにい？」
「ああ…っ！く……！！」
ぐりぐりと怪人の踵が股間を圧迫する。
「ククク…さあ今から何が始まると思う？」
観客の男たちは「この体勢は…まさか…」と少しにやけながら、ざわついている。
「今までの屈辱…しっかり返させてもらうぜ！」